

平城宮第305次発掘調査（第一次大極殿院・埴積擁壁～西面回廊地区）現地説明会資料

平成 11 年 9 月 26 日

奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

1、はじめに

本調査地は、710 年（和銅 3）に都を移した平城京の中で、もっとも重要な建物である大極殿が最初に建てられた地区にあたります。この大極殿は後に東の方に造営されたものと区別して第一次大極殿（前期大極殿）、それを中心に回廊で囲まれた範囲を第一次大極殿院と呼んでいます。大極殿院の規模は東西 178m、南北 318m をはかります（第 1 図）。

大極殿は、天皇の即位や元旦の朝賀、外国からの使節との謁見などまさに国家的儀式が執り行われた場であり、そこはちょうど朱雀門の真北にあたります。今回の調査は、第一次大極殿の復原整備事業の一環で、大極殿を際立たせるように一段高くした壇の前端（埴積擁壁）が斜めに折れて南へ延びてくるところから西側の回廊にかけての地区を調査したものです。この壇はそのまま両翼で徐々に高さを下げ広場へつながるもので、その上面が壇の上へあがる通路として利用されたと考えられています。

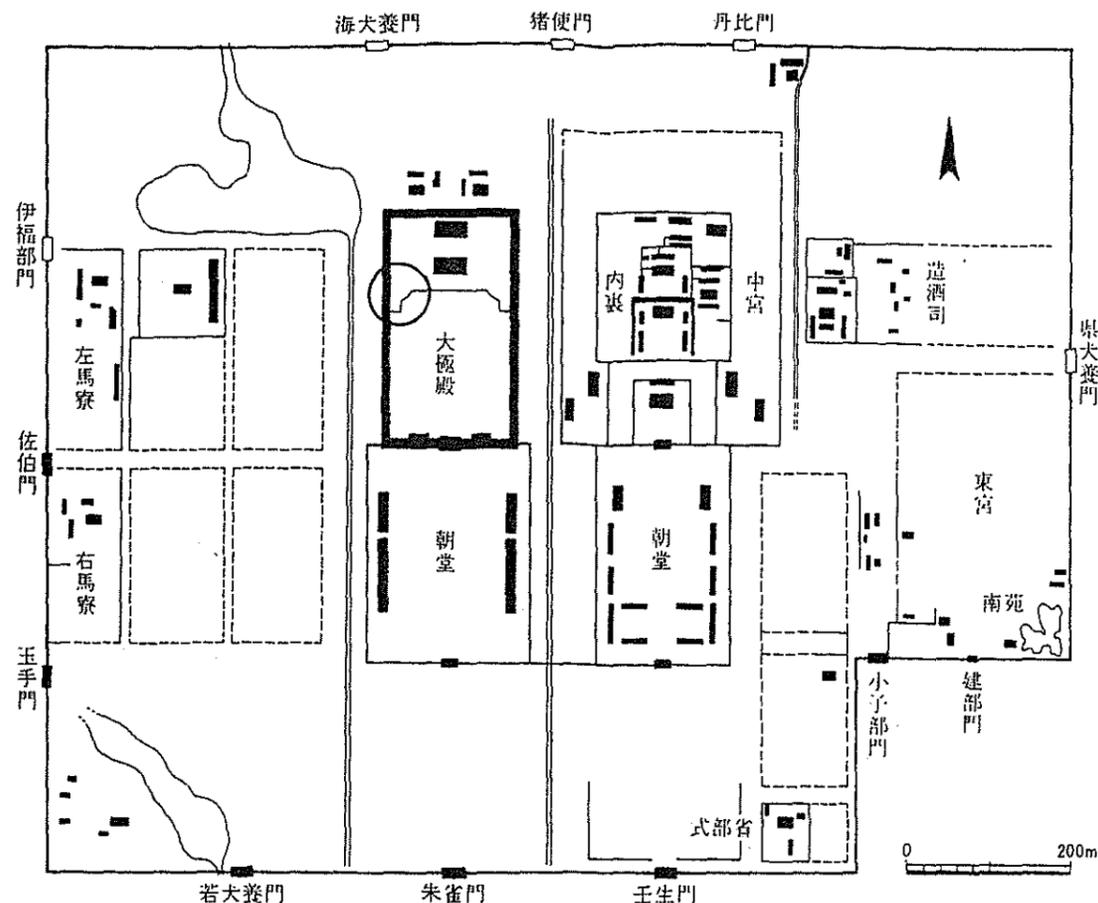
6 月 28 日に重機による掘削を開始して今日に至るまで、ほぼ 3 ヶ月を経過し、調査区の全体像が大方判明しましたので、説明会を開くこととなりました。調査面積は約 1550 m²です。

2、第一次大極殿院地区の歴史

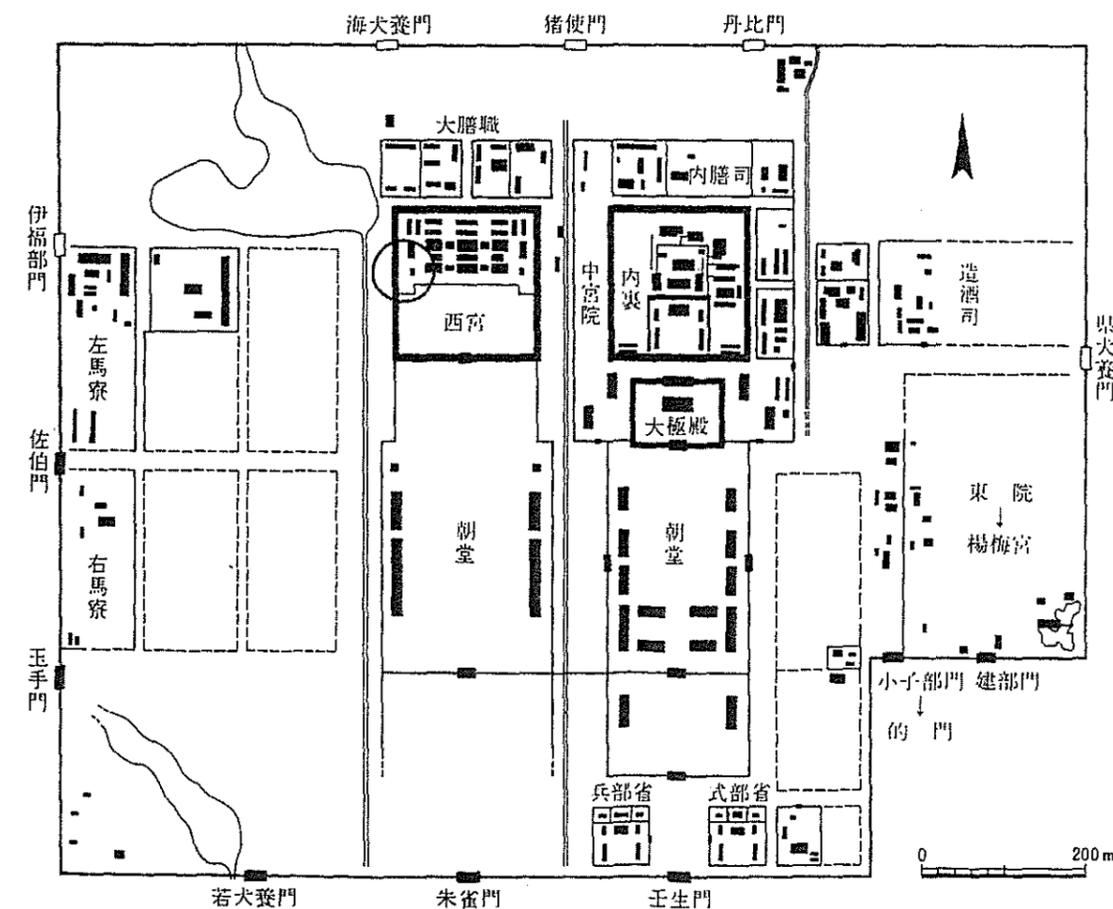
平城宮第一次大極殿院地区は、これまでの調査と研究により、造営後から平安時代にかけて幾度かの改作が行われていることが明らかになっています。まず、最初に建てられた第一次大極殿は、聖武天皇によって 740 年（天平 12）に山背国恭仁宮に移されます。そして、再び 745 年（天平 17）に天皇が平城京に戻ったあと、当地の東方に第二次大極殿（後期大極殿）が建てられました。以後、もとの大極殿があったこの地は称徳天皇の住まいである「西宮」として利用されたと推測されています（第 2 図）。そこには数多くの建物が林立するようになります。さらにその後、長岡京を経て 794 年（延暦 13）に平安京へと都が移って行くのですが、平安京遷都後しばらくしてから、809 年（大同 4）に桓武天皇の後の平城上皇が同地に住んだことがありました。

このように、同地の利用は平城京に都が戻る時期を境に、奈良時代を前後の 2 時期に分け、平安時代初頭の平城上皇が住んだ時期をさらに一つの時期として計 3 時期に分けて理解することが可能です。当研究所ではそれぞれをⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期と呼び分けてきました。ここでもその時期区分を踏襲して報告したいと思います。

なお、検出した主な遺構には次頁上段のようなものがありますが、とくに注目される埴積擁壁と、西面築地回廊を中心に説明します（第 3 図）。



第 1 図 奈良時代前半の平城宮



第 2 図 奈良時代後半の平城宮

検出した主な遺構

塼積擁壁	1	掘立柱塼	1
バラス敷広場	1	掘立柱建物	5
築地回廊	1	溝	5 (うち暗渠1含む)
築地塼	1		

3. 塼積擁壁

大極殿が載る地盤の前面を塼と呼ばれるブロック状の煉瓦で飾った塼積擁壁は、1970年に大極殿の中心線を挟んでちょうど反対側の東側部分を調査した際に発見されています。今回の調査区でもそれと対応した位置で上色が変わるラインが見えていたので、Ⅱ期・Ⅲ期の遺構面を一部掘り下げて、想定通り途中で屈折する塼積擁壁を確認しました。それは大極殿前方を約100mの範囲にわたって東西に画くしてきた擁壁がいったん南西方向へ折れ、約11m行ったところで、さらに逆方向へわずかに屈折するところにあたります。想定ではその屈折点から12mほど伸びたあと、南へもう一度折れるはずですが、その付近は大きな攪乱によってすでに失われていることがわかりました。

今回検出した擁壁は、東側より遺存状況がよく、とくに塼の積み方や各コーナーの様相がはっきりつかめます。使用されている塼は長さ29cm、幅15～15.5cm、厚さ8.5cmの規格で作られたもので、それを縦の目地が交互にずれるように平積みしています。しかし、調査区内でみつかった2つのコーナーはともに、打ち欠きなどで規格より短くした塼を多用し、各面の端が一直線になるようにつないでいます。塼はもともとよく残っていたところでも5段分しかありませんが、本来これが約2.1～2.5mほど積まれていたと考えられます。その角度は約70度で、地山をその角度に削り出し、その面に添わずようように内側がやや低くなるように積んでいます。

塼積擁壁の前にはバラス敷きの面が広がります。この面の高さは北側のコーナーでは反対の東側及び大極殿中心線上での高さとの変わりがなく、塼積擁壁の前面はまったく水平であったことがわかりました。ところがそこから折れて西へ向かうに連れて、徐々に下がっています。検出した2つのコーナー間ですでに15～20cmの落差があり、東側と比べてその差は大きなものとなっています。塼の横方向の目地もその傾斜に応じて斜めに下がっています。

大極殿院の復原については、これまで回廊の高さが大極殿の建つ場所に比べてかなり低い点について、上面をどう仕上げたかが大きな問題となっていました。今回、今述べたように塼の基底や横目地が地形なりに下がっていくことが確かめられましたので、それによりひとつの手がかりが得られたと言えます。つまり、南へ折れ始めるコーナーから西へは大極殿上面も塼の傾きに応じて、あるいはそれ以上に下がっていったと考えた方がよいことが明らかになりました。このことを西側の回廊が東側に比べてかなり低いことと考え合わせると、大極殿院は第7図に掲げたような勾配をもつ姿に復原できる可能性があります。

しかし、今後詳しい検討をつめていく必要があります。

さて、この塼積擁壁の性格については、これまでも中国唐の宮殿をモデルにしたものと考えられてきました。とくに1995年から1996年の再調査で明らかになった大明宮含元殿の竜尾道との関係が注目されます(第6図)。日本ではこうした施設は前の時代、そして第二次大極殿にもなかったもので、平城宮を営む時に強烈な唐文化の摂取の姿勢があったことを示すものといえるでしょう。

今回の調査によっても、塼積擁壁の上面の姿がはっきりつかめなかったので正確な比較は難しいのですが、含元殿で確認された後期(670年・咸亨元～)の竜尾道との形態上の類似が再認識されました。宮殿の左右から高い壇へ上がっていくこと、そしてその壇の壁面を塼で装飾することは明らかにその模倣と言えます。しかし、斜めに屈曲する形状と直角にスロープと平坦面をつないで上がっていく含元殿とはその複雑さや高低さ、装飾性においてかなりの隔りがあることも事実です。中国側の調査の進展とともに、今後の比較研究に期待が大いに寄せられます。

なお、この塼積擁壁はⅡ期になると、埋め立てられ、それ以後そこにも建物が立ち並びます。この埋め立てられた土の中には基壇の版築土の塊が見られました。大極殿の基壇を崩したものである可能性があります。

4. 西面回廊・築地

大極殿院の西を限る回廊については平城宮の歴史とこれまでの調査成果などを総合して、幾多の変遷が考えられています。しかし、各時代の遺構が良好につかめたことは少なく、多くは最終の姿が残っていたにすぎません。それが、今回の調査では凝灰岩製の暗渠がよく残っていたこともあり、各時期の遺構とその間の変遷の様相がかなりの程度明らかにできる成果が得られました。以下、要約して述べます。

Ⅰ期 大極殿と塼積擁壁が東側にあったとき、ここには築地回廊が完成します。築地回廊とは中央に築地塼をもち、その軒を支える礎石立ちの柱列を両側にもつもので、基壇上に構築されます。その造営のために、西側に傾斜する自然地形に大きく盛土をおこなっています。これに伴う遺構としては溝3(西雨落溝?)と回廊東側のⅡ期以後の遺構下に存在する溝2(東雨落溝)があります。ただし、溝2の東雨落溝は当初の原形を大きく損なっているようで、昨年調査された北側隣接地でみつかった縁石列は残っておりません。礎石の据付痕もみつかっていないことから、当初の基壇上面は大きく削平されているものと思われる。

また、その東側の溝1は回廊の軸と方向が異なっており、かなり早い時期の整地上が一部覆っていたことから、回廊造営に先立つ排水溝である可能性があります。

この最初の築地回廊は聖武天皇の恭仁京遷都に伴い解体され、その間、回廊の西側柱列の筋に掘立柱塼が築かれます。これが塼1です。掘立柱塼とは太い柱を立て、その間を土

の壁で埋めて塀とするものです。西雨落溝ではないかとした溝3は東側でみつかった次のⅡ期の雨落溝に比べ回廊柱列に近すぎるので、この塀に伴うものかもしれません。

Ⅱ期 ここに再び築地回廊が営まれます。この時の基壇上に配置された礎石の抜き取り痕の並びが東西対称に並んで出てきました。一部、礎石を安定させるために噛ませた石が残っています。溝4はこの築地回廊に伴う東雨落溝と考えられ、従来の調査成果を裏付ける位置に出てきています。なお、この溝はⅠ期の基壇の裾を造り替えて設けられており、その南半では溝の中に石が詰められている様子がわかります。

この溝の水を回廊の西側に抜くために造られたのが溝5で、暗渠にして築地回廊を抜いています。暗渠は長さ105cm(3.5尺)ほどの長方形の凝灰岩切石を4枚箱型に組み合わせたものをつなぎあわせて水路としたもので、平城宮でこれほど良好に残存した例はとても珍しいと言えます。残存長は7.5mあります。蓋石も、築地に覆われている部分では残っており、蓋石をのせるための石の加工にはバラエティが見られます。けれども回廊の西側は抜き取りが著しく、推定で本来11組つないでいたことがかろうじて推測できる程度でした。これらの凝灰岩はそれ以前にあった基壇建物の外装などの転用材と思われる。

暗渠の東側では蓋石が東端から約1mのところまで途切れることがその加工痕からわかります。このことはそこから東は暗渠ではなく開渠(上に開いた溝)であった可能性を考えさせます。

凝灰岩製の暗渠はその後回廊の中と外で別々に2度にわたって解体されています。まず、回廊の西側の部分は築地以外のところは凝灰岩を完全に抜き取ったところに、瓦や土器を多量に含む上で埋め戻してありました。その土器や瓦は奈良時代後半から末を中心とした年代観を示し、その頃にⅡ期の遺構が廃絶したことがわかります。なお、そこから出土した1点の須恵器には底に「近衛府一」との墨書がみつけられました。これについては後で述べます。

これに対して、築地の東側では蓋石のみ抜き取られていて、底石と側石はすべて残っていました。この蓋石がはずされたのは次のⅢ期のことと思われる。

Ⅲ期 回廊のあとに築地が形成されます。築地の基底はⅡ期以前の回廊基壇土を削り出してそのまま上に土を積み重ねています。その裾は幅約1.8mほどの平坦面をもち、さらにその外側に浅い溝ないし段が削り出されています。この中や肩付近から多くの土器がみつかり、この遺構の時期が平城上皇期であることを示しています。

Ⅱ期以前の回廊を削り出して造るときに、暗渠の蓋石が露出して邪魔になったためそれだけはずし側石以下の部分は抜き取らずに埋め戻したようです。

上述の回廊、築地遺構の寸法は以下のとおりです。

Ⅰ期築地回廊	基壇幅	(10.8m・36尺)
Ⅱ期築地回廊	柱間	4.0m・13.5尺 東西柱間 7.2m、24尺 基壇 10.8m36尺
Ⅲ期築地	築地本体幅	1.5m・5尺、基壇幅 4.5m、15尺

その他の建物遺構についてはその概要のみお知らせします。

掘立柱建物1	Ⅱ期	7間×4間	柱間10尺等間	南北庇、北孫庇、西棧敷階段付
同 2	Ⅱ期	7間×4間	柱間10尺等間	総柱建物
同 3	Ⅱ期	4間×2間	柱間南北10尺、東西9尺	東庇付
同 4	Ⅲ期	4間×2間	柱間10尺等間	東西庇付
同 5	Ⅲ期	?間×2間	柱間8尺等間隔	小規模建物

なお、これらは一部を除き東側でも同じ位置で同じ規模のものがみつかり、左右対称の空間であったことがあらためて裏付けられました。しかし時期の比定については遺物の検討次第では多少の変動がありえます。

5、出土遺物

出土した遺物は上層で出土した鎌倉時代のまとまった遺物をのぞくと、古代の土器や瓦がほとんどです。

これらの遺物の中でもっとも注目されるのが「近衛府一」の墨書のある須恵器片です。「近衛府」とは、近衛と呼ばれる武官を率いて、禁中の警備を担当した役所のこと。それが「近衛府」という名称で存在したのは765年から807年のことで、それが出土した暗渠の抜き取り時期と符合しています。この地区が奈良時代後半に称徳天皇の宮であったと推定されていることを考えると、天皇に近侍して警備する近衛府の墨書土器が出土したことは興味深い事実といえるでしょう。

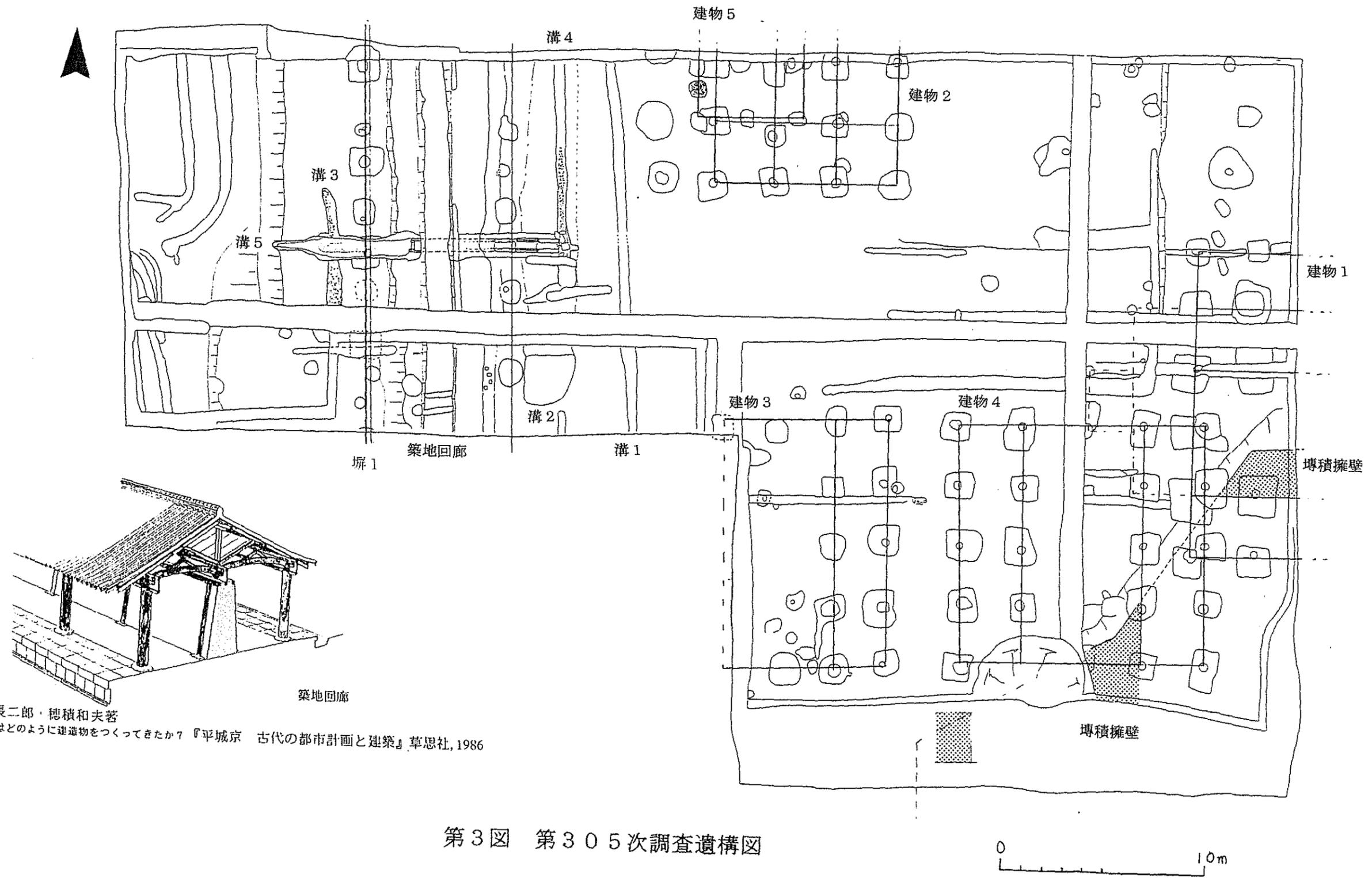
このほか、銅を頭に被せた見事な鉄釘が1本出土しています。

6、まとめ

今回の発掘調査によって、大極殿の埴積み擁壁の構造が明らかになったことによって、大極殿院全体の復元と中国との比較研究に有用な情報が得られました。また、回廊部分の変遷がほぼ明らかになったことは、大極殿院ひいては平城宮全体の変遷を考えていく上でひとつの基準を提起したものだといえるでしょう。

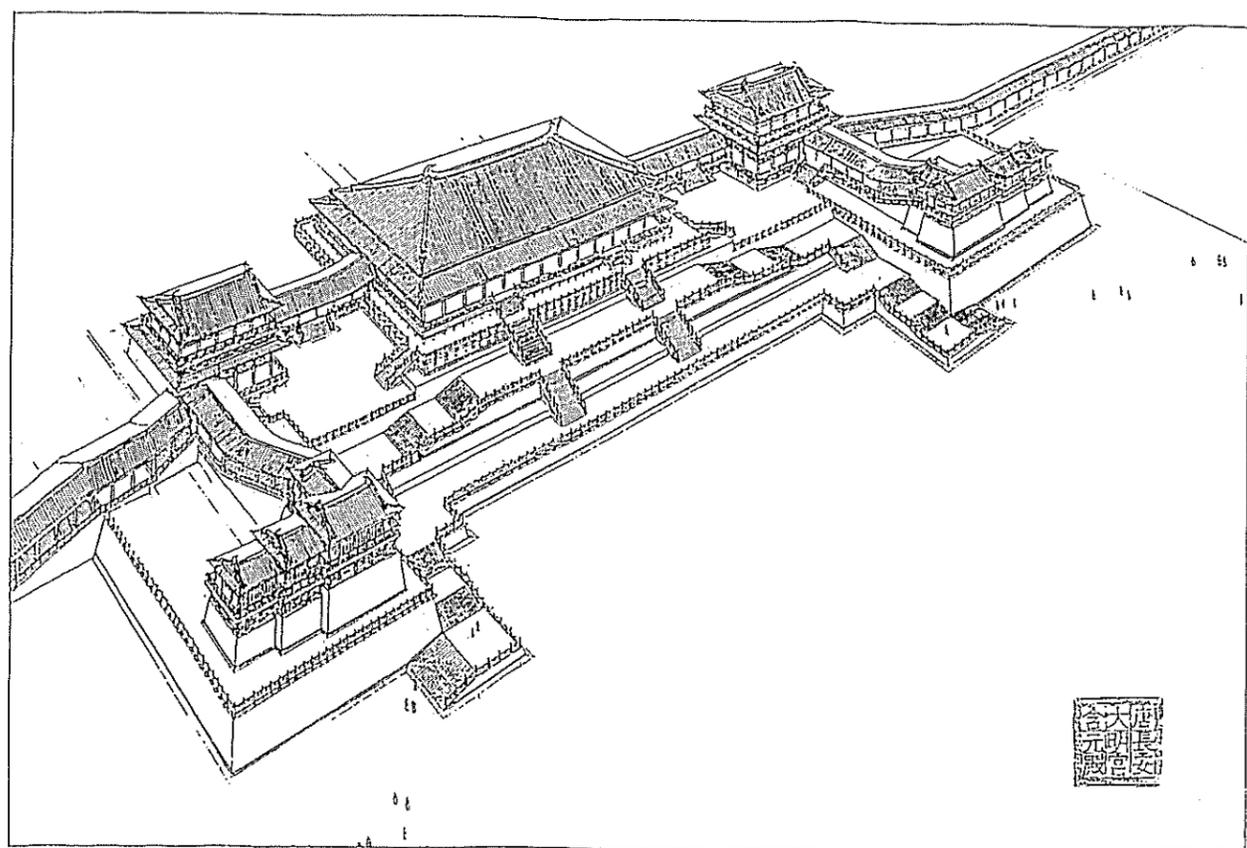
第一次大極殿院地区関係略年表

元明	和銅3(710).3.10	平城京に遷都。
聖武	天平12(740).12.15	恭仁京に遷都。 この後平城の大極殿と歩廊を壊ち、恭仁京に遷し造る。
	17(745).5.11	平城京に遷都。
称徳	宝亀1(770).8.4	称徳天皇、西宮の寝殿で崩御。
桓武	延暦3(784).11.11	長岡京に遷都。
嵯峨	大同4(809).12.4	平城上皇、平城に幸す。
	弘仁1(810).9.	平城上皇、平城遷都を図るも失敗(葉子の変)。以後も平城宮に居す。
	天長1(824).7.7	平城上皇崩御。



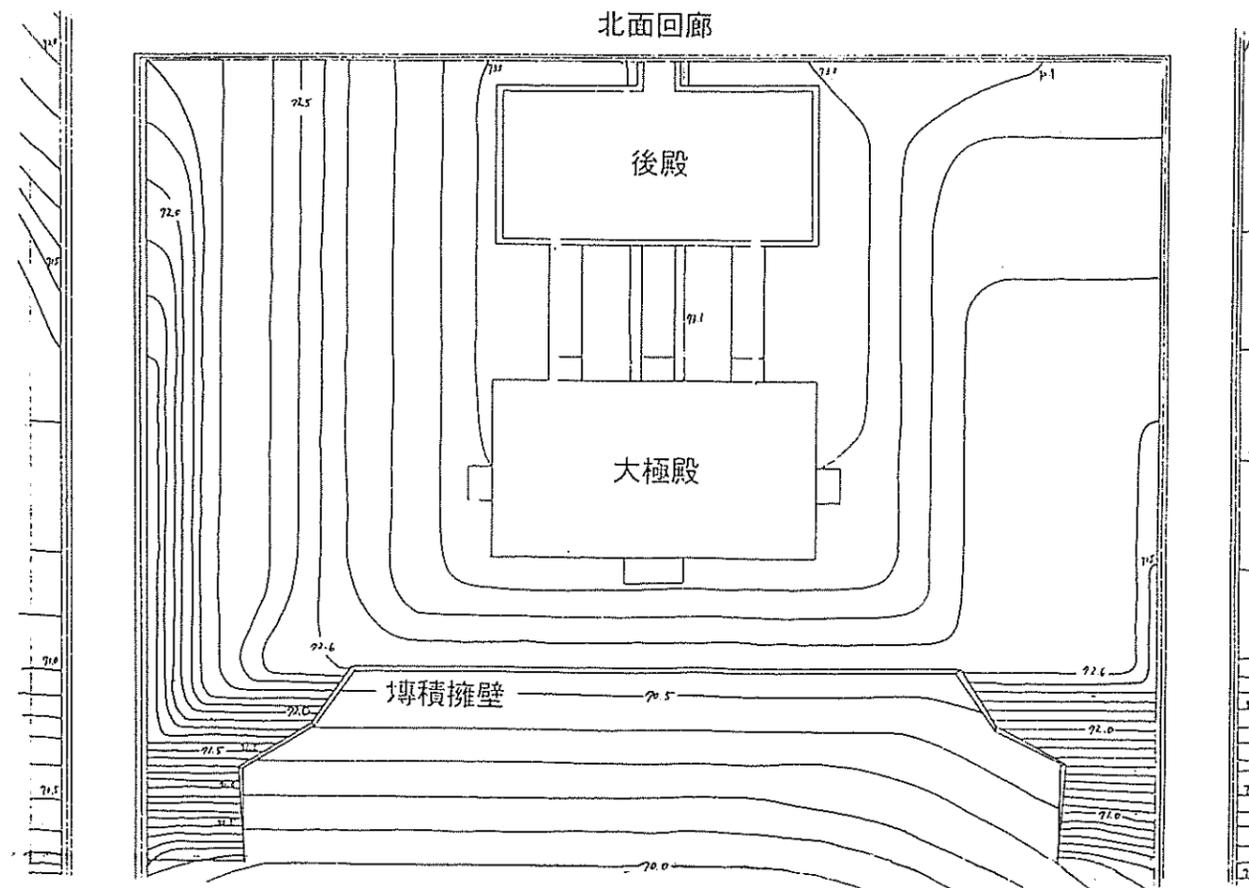


第5図 第一次大極殿院復原模型（平城宮資料館）



第6図 唐長安大明宮含元殿の復原鳥瞰図（竜尾道改造以後）

楊鴻勳「唐長安大明宮含元殿の復元的研究」『仏教芸術』233号、1997年



第7図 第一次大極殿院地形復原案